

中国語話者による 日本語のテンス・アスペクト習得研究

— 「結果の状態」用法を中心に

西坂祥平

◆要旨

中国語を母語とする上級日本語学習者を対象に、多肢選択課題を用いて、アスペクト習得におけるテンスの違いによる影響および、その習得段階、母語の影響を調査した。崔（2009）の問題点を指摘した上で、再検証を行った結果、中国語話者は上級であってもル形、タ形、テイル形、テイタ形の対立の仕方を習得しているとは言い難く、使い分けに混乱していると思われる結果が得られた。用法別、テンス別に見てみると、「動作の持続」「結果の状態」両用法において「現在>過去>未来」の順に正答率が上がるといふ、先行研究とは一部異なる結果も得られた。こうした習得の難易度は、現在テンスと未来テンスを表すテイル形と、過去テンスを表すテイタ形の形式上の違いに起因するものである可能性がある。

◆キーワード

テンス・アスペクト、習得段階、結果の状態、母語の影響、中国語話者

◆ABSTRACT

This study, which is conducted as a replication of Cui (2009), examines the acquisition of Japanese tense-aspect markers, -ru, -ta, -te i-ru and -te i-ta, by advanced Chinese learners of Japanese. This study will examine i) the influence of different tense to acquiring aspect, ii) the developmental stages of the resultative state meaning, and iii) the influence of the learner's L1. The result from the multiple-choice questions shows that the advanced learners had difficulties in selecting the correct markers. It is also found that the present tense was easier than the past tense, which was easier than future tense in both of the resultative state and progressive meanings. This result doesn't fully support Cui's conclusion. The difficulty of future tense could be attributed to the same form of present and future tense.

◆KEY WORDS

tense-aspect, developmental stage, resultative state, transfer, Chinese learners

Chinese Speaker's Acquisition of
Japanese Tense and Aspect
Focusing on the resultative state meaning
SHOHEI NISHIZAKA

1 はじめに

第二言語としての日本語の aspekt 習得は、これまでに多くの研究が行われてきているものの、現在テンスを表す「テイル」に焦点を当てたものが多く、異なるテンスによる習得難易度の検討は十分に行われているとは言い難い。本研究では、日本語の aspekt 習得におけるテンスの影響を検討した崔 (2009) を取り上げ、調査上の問題点を指摘した上で追検証を行う。具体的には、上級日本語学習者である中国語話者を対象に、多肢選択課題を用いて aspekt 習得に与えるテンスの影響および、そこに現れる母語の影響を考察する。

2 崔 (2009)

崔 (2009) は、aspect 習得におけるテンスの影響を考慮して、現在・過去・未来における「動作の持続」と「結果の状態」の用法の習得難易度を提示したという点で重要な研究である。この節では、崔 (2009) の概要をまとめ、問題点を指摘した上で、本研究の研究課題を提示する。

2.1 概要

崔 (2009) はテイル形の基本的な用法とされる「動作の持続」(例、太郎はご飯を食べている。)と「結果の状態」(例、財布が落ちている。)の習得について、ル形、タ形、テイル形、テイタ形が選択肢の多肢選択課題を用いた調査を行った。対象者は中国語を母語とする日本語学習者161名で、統制群として日本語母語話者220名にも同様の調査を実施した。崔は学習者を多肢選択課題の成績によって下位群、中位群、上位群に分類し、「動作の持続」「結果の状態」を表すテイル形・テイタ形について次のような習得段階があることを示した。

(1) 崔 (2009) による習得段階

第一段階：テイル形 (動作の持続) が使えない段階 (ル形とタ形のみ)

第二段階：テイル形 (動作の持続・現在) が使える段階

第三段階：第二段階に加えて、テイタ形 (動作の持続・過去) とテイル形 (動作の持続・未来)、テイル形 (結果の状態・現在) が使える段階

(1) からわかるように、崔 (2009) は a) 「動作の持続」の方が「結果の状態」より習得しやすいこと、b) 用法にかかわらず、現在テンスのテイルは、過去や未来のテイルより習得しやすいこと、c) 用法にかかわらず、過去テンスのテイル (テイタ形) と未来テンスのテイルに習得難易度の差はないことを示した。

しかし、崔 (2009) にはいくつかの問題点が存在する。まず、崔は最初の段階でル形とタ形だけの段階があるとしているが、ル形とタ形の習得については検証していない。野田 (2001) が指摘するように、学習者が習得すべきは、ル形とテイル形のように対立関係にある項目の「対立の仕方」であり、この点を確認するには、義務的文脈におけるル形とタ形の習得も調査する必要がある。

さらに、崔 (2009) の導き出した三番目の習得段階でも過去テンスと未来テンスの「結果の状態」は習得されていない。たしかに崔の結果からは過去テンスと未来テンスの間に難易度の差は見られないが、より習熟度の高い学習者ではどのような結果が得られるのかについては、検証の余地があると言える。

次に、崔のデータにも現れているように (崔2009: 85)、中国語話者に顕著な誤用として「結果の状態」のテイル形を用いるところでタ形を用いる誤用がある (例、あっ、靴下が破れた。 (張2001: 141)) (小山2003なども参照)。

このタイプの誤用は、中国語では対応する状況で完了マーカー「了」を用いるからであると指摘されているが (許2005, 張2001, 小山2003)、崔が提案する習得段階 (1) にはこのような母語の影響がまったく考慮されていない。また、「結果の状態」で、崔が調査に用いた動詞を見ると、対応する中国語の動詞の中に性質の異なる二つの aspekt マーカーが接続可能なものと、そうではないものが含まれている (詳細は後述)。こうした学習者の母語に見られる特徴は結果に影響していないのだろうか。これらの点をさらに掘り下げるため、次項で中国語のテンス・aspect についてまとめる。

2.2 中国語のテンス・aspect について

過去と非過去というテンスの対立を持つ日本語と違い、テンスにかかわらず

動詞の形が変わらないことから、中国語には文法範疇としてのテンスがないと言われる。現在・過去・未来を表すのには、動詞の持つ性質や、他の語との共起、文脈などを用いる。テンス形式とは異なり、中国語にはアスペクトを表すマーカーが豊富に存在する。例1は「(正) 在」を用いて「動作の持続」を表している。例2と例3は、「了」が完了・実現を表している。「了」は通常、日本語のタ形に対応することが多いが、変化を表す動詞の場合、「了」と結びついて日本語では「結果の状態」のテイル形に訳す方が自然な場合もある(張 2001, 庵 2010, 稲垣 2013)。さらに、中国語には動詞に後接して行為や変化の持続を表す「着」が存在する。例4は雪が降り続けていることを表している。また、一部の動詞は、「着」が付加されることで、動作が完了したあとの状態を表す。例5ではドアが開いて、開いたままの状態であることを表している。例5は「了」が後接すれば、ドアが開くという変化を表す。このように、動詞によっては「了」と「着」の両方と接続が可能である。

- 例1. 雨 (正) 在 下。[雨が(ちょうど)降っている。]
雨 (ちょうど) -ている 降る
- 例2. 我 看 了 这 本 书。[この本を読んだ。]
私 読む -た この 本
- 例3. 钱包 掉 了。[財布が落ちた/落ちている。]
財布 落ちる -た
- 例4. 外 头 下 着 大 雪。[外は大雪が降っている。]
外 降る -ている 大雪
- 例5. 门 开 了 / 着 呢。[ドアが開いた/開いている。]
門 開く -た / -ている 文末助詞

しかし、崔(2009)が調査に用いた動詞には、対応する中国語の動詞において日本語のタに対応する「了」しか取れないもの(死、掉、結婚)と、「了」に加えて、日本語のテイルに対応する「着」とも接続できるもの(开)がある。母語の影響を考えると両者は区別して考える必要がある。

以上見てきた、崔(2009)で残された、さらに検討すべき課題を踏まえて、

本研究では以下の三つを研究課題(RQ)とする。

- RQ1: 「ル形」「タ形」はどのように習得されているか。
RQ2: 過去テンスと未来テンスの「結果の状態」に習得難易度の差はあるのか。
RQ3: 「結果の状態」を習得する際、対応する中国語の動詞とアスペクトマーカー(「了」「着」)の結びつきの可否による差が見られるのか。

3 調査方法

3.1 調査対象者

調査対象者は中国語を母語とする上級日本語学習者26名である。習熟度は、日本語能力試験N1を取得済みであることおよび、日本の大学あるいは大学院に在籍し、日本語を用いて専門分野を学んでいることなどから上級であると判断した^[注1]。また統制群として日本語母語話者21名にも同様の調査を実施した。

3.2 調査資料および手続き

調査には崔(2009)同様、ル形、タ形、テイル形、テイタ形が選択肢の多肢選択課題を用いた。問題は、12個の動詞それぞれにつきル形(非過去)、タ形(過去)、テイル形(現在)、テイタ形(過去)、テイル形(未来)の計5形式が正解となる問題を、崔の調査問題を踏襲しながら作成した。さらにダミー問題として、使役や受身の形式を問う問題16問を加えて、計76問で調査を行った。12個の動詞は、テイル形が「動作の持続」「結果の状態」いずれを表すかによって以下のように分類できる(下線のあるものは崔と同様の動詞)。

- (2) テイル形が「動作の持続」を表す動詞
食べる、寝る、作る、勉強する
- (3) テイル形が「結果の状態」を表す動詞
死ぬ、落ちる、壊れる、結婚する、開く、停まる、(電気が)つく、座る

さらに、本研究では対応する中国語の動詞と中国語のアスペクトマーカ―「了」「着」との結びつきによる差を検証することを目的としているため、この観点からテイル形が「結果の状態」を表す動詞をさらに二つに分類した。(4)に示した対応する中国語の動詞が「了」とだけ接続可能なもの(以下、タイプ1)と、(5)に示した「了」「着」いずれとも接続可能なもの(以下、タイプ2)の2種類である。(4)(5)の括弧内は対応する中国語の動詞を表している。

- (4) タイプ1: 死ぬ(死)、落ちる(掉)、壊れる(坏)、結婚する(结婚)
 (5) タイプ2: 開く(开)、停まる(停)、(電気が)つく(亮)、座る(坐)

問題はまずその状況を説明する文が与えられ、続く会話中に空所が設けられていた。すべての漢字にはルビを付した。調査に用いた項目例を表1に示す。調査紙には「動作の持続」、「結果の状態」のタイプ1、タイプ2およびダミー問題の問題数を均等に、各38問のA問題とB問題に分け、各問題間で項目を無作為に並べた。A問題とB問題の間には休憩時間を設けた。対象者の半分はA問題を先に、残りの半分はB問題を先に回答した。所要時間は、中国語話者は30～45分、日本語話者は20分程度であった。

表1 調査に用いた項目例

<p>項目例a ル形</p> <p>バクさんは、朝、スーパーに買い物にきました。しかし…。</p> <p>バク: あれ? おかしいなあ。ここに「9時開店」って書いてあるけど…。(近くに)すみません、このお店、何時に_____か?</p> <p>近くの人: ああ、今日は水曜日だから、休みですよ。</p> <p>A. 開きます B. 開きました C. 開いています D. 開いていました</p> <p>項目例b タ形</p> <p>田中さんはレストランでお金を払っています。バクさんから電話です。</p> <p>バク: もしもし、今から一緒にご飯を食べに行きませんか?</p> <p>田中: ごめんなさい。ちょうど今_____ところなんです。また誘ってください。</p> <p>バク: そうですか。わかりました。また行きましょう。</p>
--

- A. 食べる B. 食べた C. 食べている D. 食べていた

項目例c 動作の持続(現在)

田中さんは友達の家で電話をしました。すると、友達の子供が電話に出ました。

田中: もしもし、お母さんいる?

友達の子供: うん、台所でご飯を_____。ちょっと待ってください。お母さんに代わります。

A. 作ります B. 作りました C. 作っています D. 作っていました

項目例d 動作の持続(過去)

昨日バクさんはパーティーに行きました。翌日、バクさんはリーさんと話しています。

バク: 昨日はどうしてパーティーに来なかったんですか?

リー: 今日の漢字のテストがあるから、家でずっと_____。

A. 勉強します B. 勉強しました C. 勉強しています D. 勉強していました

項目例e 動作の持続(未来)

田中さんは食事会に遅刻しそうです。リーさんに電話しています。

田中: もしもし。すみません、アルバイトが遅くなって…。今から移動しますから、ちょっと遅くなりそうです。

リー: そうですか。じゃあ、先に_____から、を気をつけて来てくださいね。

A. 食べます B. 食べました C. 食べています D. 食べていました

項目例f 結果の状態タイプ1(現在)

リーさんとバクさんは買い物をしています。リーさんは自分の腕時計を見えています。

リー: もう12時だよ。そろそろご飯を食べようか。

バク: えっ? 12時? 違いますよ。まだ11時ですよ。その時計は_____ね。

A. 壊れます B. 壊れました C. 壊れています D. 壊れていました

項目例g 結果の状態タイプ1(過去)

今、桜が満開です。田中さんはリーさんと桜について話しています。

リー: 今年は桜が咲くのが早かったですね。

田中: そうですね。昨日家の近くの公園に行ったら、もう花びらが少し地面に_____よ。

A. 落ちます B. 落ちました C. 落ちています D. 落ちていました

項目例h 結果の状態タイプ1 (未来)

田中さんとリーさんが、寮の玄関を掃除しています。

田中：だいぶ綺麗になりましたね。

リー：そうですね。でも、みんなが使いますから、明日はまたごみが_____でしょうね。

- A. 落ちる B. 落ちた C. 落ちている D. 落ちていた

項目例i 結果の状態タイプ2 (現在)

お母さんと子供が自宅に向かって歩いていきます。

子供：あれ？ うちの車が一台_____よ。

お母さん：お父さんのお友達の車よ。きっとお父さんに会いに来たのよ。

- A. 止まる B. 止まった C. 止まっている D. 止まっていた

項目例j 結果の状態タイプ2 (過去)

田中さんが会社で同僚と話しています。

田中：今朝、会社に来るとき、救急車が道の真中に_____。何かあったんですね。

同僚：はい、事故があったんです。私はちょうど事故を見てびっくりしました。

- A. 止まります B. 止まりました C. 止まっています D. 止まっていました

項目例k 結果の状態タイプ2 (未来)

田中さんはリーさんと電話で話しています。

田中：じゃあ、明日の3時にあの喫茶店で会おうね。

リー：うん。私は早く着くと思うから、先に行って、いつもの席に_____ね。

- A. 座る B. 座った C. 座っている D. 座っていた

4 結果と考察

分析では統制群である日本語話者の解答が85%以上一致したのもののみを扱い、その他の項目は分析対象外とした^[注2]。各項目において、学習者が選択した形式の割合を表2に示す。以下、研究課題ごとに結果を見ていく。

表2 学習者の選択語形の割合^[注3]

用法	テンス	形式	学習者の選択	割合	
非過去/過去	非過去	ル (a)	ル	96.5%	
			タ	0.7%	
			テイル	2.3%	
	過去	タ (b)	ル	0.9%	
			タ	80.7%	
			テイル	9.3%	
			テイタ	11.8%	
			ル	0.0%	
			タ	0.0%	
動作の持続	現在	テイル (c)	ル	0.0%	
			タ	0.0%	
			テイル	100.0%	
	過去	テイタ (d)	ル	0.0%	
			タ	3.8%	
			テイル	17.3%	
			テイタ	78.8%	
			ル	26.9%	
			タ	4.8%	
結果の状態タイプ1	未来	テイル (e)	ル	0.0%	
			タ	4.8%	
			テイル	68.2%	
				テイタ	0.0%
				ル	0.0%
				タ	23.0%
現在	テイル (f)	ル	0.0%		
		タ	23.0%		
		テイル	70.1%		
			テイタ	6.7%	
			ル	0.0%	
			タ	29.8%	
過去	テイタ (g)	ル	13.4%		
		テイル	13.4%		
		テイタ	56.7%		
結果の状態タイプ2	未来	テイル (h)	ル	24.0%	
			タ	22.1%	
			テイル	50.0%	
				テイタ	3.8%
				ル	0.0%
				タ	1.2%
現在	テイル (i)	ル	0.0%		
		タ	1.2%		
		テイル	97.4%		
			テイタ	1.2%	
			ル	0.0%	
			タ	3.8%	
過去	テイタ (j)	ル	9.6%		
		テイル	9.6%		
		テイタ	83.6%		
未来	テイル (k)	ル	50.0%		
		タ	1.2%		
		テイル	48.7%		
			テイタ	0.0%	

4.1 ル形およびタ形の習得難易度

まず、ル形およびタ形が正解となる問題の得点である。中国語話者のル形およびタ形の正答率はそれぞれ96.5%と80.7%であり、崔(2009)に倣って80%以上の正答率を習得とみなせば、どちらも習得されていることになる。

両者の正答率について、対応のあるt検定を行った結果、ル形の正答率が有意に高かった($t(25) = 5.33, p < .001, r = .73$)。表2で中国語話者の選択した語形を見てみると、日本語話者がタ形を正答としている文脈において、中国語話者はテイル形、テイタ形を、10%前後ずつ選択していることがわかる。表1の項目例bでは、85.7% (18/21名)の日本語話者がタ形を選択しているが、中国語話者は57.6% (15/26名)で、約30% (8/26名)がテイル形を選択している。これは空所直前の「ちょうど今」という語に引きずられたためであると考えられる。さらに次の(6)では95.2% (20/21名)の日本語話者がタ形を選択しているが、53.8% (14/26名)の中国語話者はテイタ形を選択している。

(6) タ形とテイタ形の混合が見られた項目例

<p>たなか はな 田中さんはバクさんと話しています。</p> <p>たなか きのう きっさてん きむらたくや み 田中：昨日、喫茶店でSMAPの木村拓哉さんを見ましたよ。</p> <p>バク：えっ？ ほんとうですか？</p> <p>田中：ええ、木村さんはお店に入って来て、私の席の近くに_____ んです。びっくりしましたよ。</p> <p>A. すわる B. すわった C. すわっている D. すわっていた</p>
--

これは、日本語の「座る」に相当する中国語の「坐」は「座っている状態」そのものを指すのが基本(荒川2003:16)であるという点で、身体移動を表す日本語の意味と異なるため、(6)の場面においても「座った」という変化ではなく、状態の意味を含む「座っていた」を選択したと考えられる。

崔(2009)で習得の第一段階と位置付けられていたル形とタ形であるが、今回の結果からタ形を選択すべき文脈において、小さな割合ではあるもののテイ

ル形およびテイタ形と混同している様子が窺えた。またル形に関して、ル形を選択すべき文脈において正しくル形を選択できていることから一見習得されているように見えるが、ル形を選択すべきではない文脈においてル形を選択していた。未来テンスの「動作の持続」「結果の状態(タイプ1)」「結果の状態(タイプ2)」において、26.9%、24%、50%の選択をしており(表2)、野田(2001)の言う文法項目の「対立の仕方」を習得しているとは言い難い。これは、未来テンスにおける上記の用法が習得されていないことで、未来を表すもの、つまり非過去とだけ認識したためであると考えられる。

4.2 テンス別の「動作の持続」「結果の状態」の習得段階

各テンスにおける「動作の持続」「結果の状態」用法の正答率(図1)を見ると、各テンスとも「動作の持続」が「結果の状態」より高い正答率であった。

中国語話者の各条件における正答率を従属変数とし2要因の分散分析を行った^[註4]結果、用法の主効果は有意であり($F(1, 25) = 13.62, p = .001, \omega^2 = .08$)、「動作の持続」の正答率が「結果の状態」より有意に高かった。テンスの主効果も有意であった($F(2, 41) = 42.46, p < .001, \omega^2 = .23$)。交互作用は有意ではなかった($F(2, 39) = 13.68, p = .263, \omega^2 = .002$)。

テンスの主効果が有意であったため、テンスの3水準についてShafferの方法による多重比較を行った結果、すべての水準間に有意差($p < .001$)があり、現在>過去>未来の順に有意に正答率が高かった。

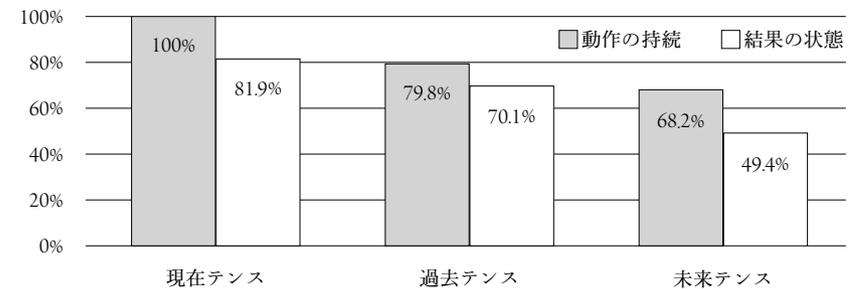


図1 各テンスにおける「動作の持続」「結果の状態」の正答率 (%)

RQ2については、「動作の持続」と「結果の状態」の習得において、テンスの違いによる難易度の差が見られた。具体的には、両用法とも現在テンスから習得が始まり、過去テンス、未来テンスの順に難易度が上がっていく。最も難易度が高いのは未来テンスの「結果の状態」であると言える。崔 (2009) では、「動作の持続」の習得は現在テンスから始まり、その後過去・未来テンスへと同時期に広がった。一方、「結果の状態」では、上級で現在テンスが習得され、過去・未来テンスは未習得のままであった。崔では、未来テンスの「動作の持続」は上級で80%を超える正答率であったが、上級レベルの学習者を対象とした本研究では70%に満たない正答率であった。この違いの一因は、崔になかったル形とタ形を正答とする問題を加えたことにあると考えられる。未来テンスのテイルを用いる文脈でル形を用いていることは表2で確認した。中国語話者が、本研究のタスクにより、このル形とテイル形の対立をより意識せざるを得なくなり、未来テンスの「動作の持続」の正答率が低くなった可能性がある。過去テンスと未来テンスの難易度の差については、後ほどRQ3に関連づけて、さらに考察を行う。

4.3 動詞のタイプ別の「結果の状態」の習得状況

最後に「結果の状態」の習得における動詞タイプによる差を調べるため、動詞タイプ別の「結果の状態」の正答率を図2に示す。

中国語話者の各条件における正答率を従属変数とし、2要因の分散分析を行った^[注5]。その結果、交互作用が有意であったため ($F(2,41) = 3.72, p = .04, \omega^2 = .02$)、単純主効果の検定を行った。テンスの各水準における動詞タイプの単純主効果を見ると、現在テンスにおいて、動詞タイプの単純主効果が有意であり ($F(1, 25) = 19.79, p < .001, \omega^2 = .22$)、タイプ2の正答率がタイプ1より有意に高かった。過去テンスにおいても、動詞タイプの単純主効果が有意であり ($F(1, 25) = 15.48, p < .001, \omega^2 = .16$)、タイプ2の正答率がタイプ1より有意に高かった。しかし、未来テンスにおいては、動詞タイプの単純主効果が有意ではなく ($F(1, 25) = 1.73, p = .20, \omega^2 = .008$)、動詞タイプ間の正答率に有意差が認められなかった。次に、動詞タイプの各水準におけるテンスの単純主効果を見ると、タイプ1動詞において、テンスの単純主効果が有意であった ($F(2, 40) = 5.41, p = .01, \omega^2 = .04$)。Shafferの

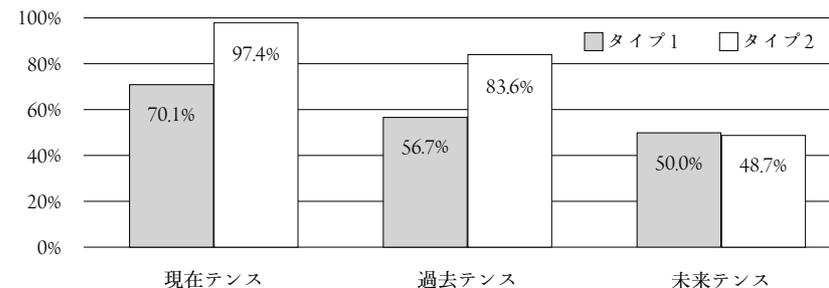


図2 動詞タイプ別の「結果の状態」の正答率 (%)

方法による多重比較を行ったところ、現在テンスの正答率が未来テンスより有意に高かった ($p < .001$)。一方、現在テンスと過去テンス ($p = .11$)、未来テンスと過去テンス ($p = .21$) には有意差がなかった。タイプ2動詞においても、テンスの単純主効果が有意であった ($F(2, 50) = 35.56, p < .001, \omega^2 = .41$)。Shafferの方法による多重比較を行ったところ、テンスのすべての水準間に有意差があり、現在 > 過去 > 未来の順で有意に正答率が高かった (現在テンスと未来テンスは $p < .001$ 、現在テンスと過去テンスは $p = .005$ 、過去テンスと未来テンスは $p < .001$)。

RQ3については、現在テンスと過去テンスの「結果の状態」において母語である中国語の影響によると思われる、タイプ間の差が見られた。まずタイプ1について述べる。表1の項目例hでは、95.2% (20/21名) の日本語話者がテイル形を選択していたのに対して、65.3% (17/26名) の中国語話者がル形を選択していた (残り9名はテイル形を選択)。これは未来のことを表していることを認識したものの、「結果の状態」に必要な「変化」までは認識していないことによると考えられる。また、未来のことであっても「完了」と捉えたことによりタ形を選択したと思われる項目も見られた。(7) では、すべての日本語話者がテイル形を選択していたが、中国語話者のテイル形の選択は46.1% (12/26名) に留まっていた。53.8% (14/26名) がタ形を選択していた。

(7) 未来テンスの「結果の状態」文脈においてタ形の選択が多かった項目

たなか 田中さんとリーさんは、^{みらい}未来の世界について^{はな}話しています。

田中：2200年は、どんな世界かなあ。

リー：きっと、もっと便利な世界でしょうね。

田中：そうだね。でも、僕たちはもう_____から、その世界は
見られないよね。

- A. 死ぬ B. 死んだ C. 死んでいる D. 死んでいた

次にタイプBについて述べる。これは表2からもわかるように、未来テンスの「結果の状態」においてタ形を選択している中国語話者はほとんど見られず、誤選択はル形に集中している。表1の項目例kでは、95.2% (20/21名) の日本語話者がテイル形を選択しているが、中国語話者のテイル形の選択は19.2% (5/26名) であり、80.7% (21/26名) はル形を選択している。これはタイプ1でル形が選択されていたとき同様、未来の出来事と認識してはいるが、その「結果の状態」に必要な「変化」を捉えられていないことによると思われる。正答率においては差が見られなかった未来テンスのタイプ1とタイプ2であるが、中国語話者の選択肢にはその差が現れていると言えよう。

以上見てきたような動詞タイプ間の差は、中国語話者による「結果の状態」のテイルの習得における母語の動詞タイプの影響を示すものである。崔 (2009) の習得段階では、このような母語の影響は考慮されておらず、その点において本研究は崔の研究を一步進めたものと言えよう。

では、RQ2およびRQ3で見られた未来テンスの「結果の状態」が最も習得が困難な理由についてはどのように説明できるだろうか。これは形式上の差異が原因として挙げられる。テイタ形は過去を表す「-タ」が含まれているため、過去を表すと認識するのは容易であると考えられる。一方、未来テンスでは形式的には現在テンスと同じテイルを用いる。そのため学習者がインプットに触れたとしても、現在テンスのテイルとの差異が認識されにくいと考えられる。そのため、未来テンスのテイルを選択すべき文脈であっても、中国語話者はその文脈を「未来」とのみ認識し、ル形を選択してしまったのであろう。この傾向は、「動作の持続」と「結果の状態」の違いや、「結果の状態」の動詞タイプの違いにかかわらず、未来テンスのテイル全般に見られ、上級でも根強いものであることを示唆している。このように、未来テンスのテイルの困難さは、日

本語の持つ形式上の特徴によるものである可能性が考えられる。

5 まとめと今後の課題

本研究では上級学習者によるアスペクト習得におけるテンスの違いによる影響および、その習得段階、母語の影響を調査した。崔 (2009) の問題点を指摘した上で、再検証を行った。以下に、研究課題ごとに結果をまとめる。

RQ1：「タ形」を選択すべき文脈において、「テイル形」「テイタ形」の選択が見られた。「ル形」については、選択すべき文脈において正しく選択できていたが、「ル形」を選択すべきでない文脈において「ル形」の選択が見られた。

RQ2：未来テンスの「結果の状態」は、過去テンスの「結果の状態」より習得が困難であることが明らかになった。

RQ3：現在テンスと過去テンスの「結果の状態」を習得する際、対応する中国語の動詞とアスペクトマーカー（「了」「着」）の結びつきの可否による差が見られた。未来テンスではその差が見られなかった。

中国語話者は上級であってもル形、タ形、テイル形、テイタ形の対立の仕方を習得しているとは言い難く、使い分けに混乱していると思われる結果が得られた。さらに用法別、テンス別に見てみると、「動作の持続」「結果の状態」両用法において「現在>過去>未来」の順に正答率が上がるという、先行研究とは一部異なる結果も得られた。こうした習得の難易度は、現在テンスおよび未来テンスを表すテイル形と、過去テンスを表すテイタ形の形式上の違いに起因するものである可能性を述べた。

最後に今後の課題を述べる。まず今回対象とした学習者の習熟度を上級と判断はしたものの、客観的なテストによるものではないため、対象者間に日本語力の差があった可能性も否定できない。習得段階についても習熟度別に見たものではないため、その習得の過程を観察することはできていないとも言えよう。特に他形式との対立については、「どの段階で、どの形式とどの形式」の

対立が問題となるか検証する必要がある。また、本研究で、中国語の影響と指摘した点については、テンス・アスペクトの体系が中国語とは異なる母語を持った日本語学習者との比較を行って初めて、それが中国語の影響であるかどうかを確認できる。今後は、異なる習熟度、異なる母語を持つ学習者を含めて、さらに研究を進めていく必要があると言える。 〈名古屋大学大学院生〉

謝辞

本稿の執筆にあたり、名古屋大学大学院の稲垣俊史先生から御指導を賜りました。また、南山大学大学院の坂本正先生、下駄真奈美さんから貴重なご教示をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

注

- [注1] …… 学習者の滞日期間は1年未満が3名、1年以上3年未満が11名、3年以上5年未満が4名、5年以上が8名で、平均3.9年であった。
- [注2] …… 85%以下の正答率であった項目は、「食べる」、「食べた」、「作る」、「つく」、「ついている」(現在)、「ついている」(未来)、「停まっている」(現在)。
- [注3] …… 「形式」欄の括弧内のアルファベットは表1の項目例との対応を示している。網掛け部分は正答を表す。
- [注4] …… Mauchlyの球面性検定の結果、球面性の帰無仮説が棄却されたため、Greenhouse-Geisserの方法により自由度を調整した。
- [注5] …… 注4と同様。

参考文献

- 荒川清秀 (2003) 『一步ずつんだ中国語文法』大修館書店
- 庵功雄 (2010) 「第1回 アスペクトをめぐる」『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号, pp.41-48.
- 稲垣俊史 (2013) 「テイルの二面性と中国語話者によるテイルの習得への示唆」『中国語話者のための日本語教育研究』4, pp.29-41.
- 許夏珮 (2005) 『日本語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版
- 小山悟 (2003) 「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性—母語の役割と影響を中心に」小山悟・大友可能子・野原美和子 (編) 『言語と教育—日本語を対象として』 pp.415-436. くろしお出版
- 崔亜珍 (2009) 「SRE理論の観点から見た日本語テンス・アスペクトの習得研究—中国人日本語学習者を対象に」『日本語教育』142, pp.80-90.
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例』スリーエーネットワーク
- 野田尚史 (2001) 「文法項目の難易度」野田尚史・渋谷勝己・迫田久美子・小林典子 『日本語学習者の文法習得』 pp.101-120. 大修館書店